化石　73，42-43，2003
Fossils
The Palaeontological Society of Japan

ケンペルが日本で収集した化石をロンドンで見る

矢島道子
東京成徳学園

A very large alveolus from Japan by Dr. Kaempfer

Michiko Yajima
Tokyo Seitoku Gakuen, Tokyo 114-0003 (m-yajima@hi.tokyoseitoku.ac.jp)

はじめに

古生物学の歴史を簡単に勉強するには，ロンドン自然史博物館のW. N. Edwards (1967) が著した"The Early History of Palaeontology" が58ページの小冊子で，とてもよい．自然史の歴史の紹介書としてもよくできている．ピタゴラスもショイヒツアーも，主要なところはレオナルド・ダ・ヴィンチの化石論もロバート・フックの化石論も全部載っている．山椒は小粒でピリリと辛いというところである．パラパラと見ているうちに，51 ページに"a belemnite brought from Japan by Kaempfer" なる１文を発見した．「ケンペルが日本からベレムナイトを持っていった？」初耳である．早速，何人かの日本の古生物学者に訊いてみた．誰一人聞いたことがないという．実は，同じ日に古本屋でケンペル展（1990-91）の解説目録を入手していた．偶然とはいえ，ありがたい．しかし，いろいろ調べてみたが化石の話は何もでてこない．早速イギリスの友人にも尋ねてみた．「あるよ，大きな alveolus が」という答えが返ってきた．もう決まった，私は今春（2002）ロンドンの自然史博物館の扉をたたいた．

ケンペルの化石の記載

ケンペル (Engelbert Kaempfer 1651-1716) はオランダ東インド会社の医者として1690年日本へやってきた．日本から多くの標本その他を持ち帰った．1694年ドイツに帰国し，結婚して子供が出来たが夭逝し，ケンペルの死後，甥ヨハン・ヘルマン・ケンペルが財産を引き継いだ．その甥は，ハンス・スローン卿 (1660-1753) にケンペルの標本その他を1723年と1725年に分けて売ってしまった．大英博物館はハンス・スローン卿の標本を元にしてでき，自然史部門はその後独立した．ケンペルの『日本誌』はヨハン・カスパル・ショイヒツアー（スイスのショイヒツアーの息子）が，イギリスに滞在中に英訳して出版された (1727)．

ケンペルの『日本誌』は，復刻版が出ている．これには何も化石について書かれていない．ケンペルの研究者は多いが，化石についてふれているのを見たことがない．先述のEdwardsの記載以外には，Thackray (1994) が「スローン卿が購入したコレクションとして重要なものにケンペルのコレクションがある．ただし，鉱物と化石は明らかに多くはない．標本台帳に記載してある物は２つある．ひとつは A very large alveolus from Japan by Dr Kaempfer と書いてあり現存するが，日本からの金鉱石は紛失している」と書いてある．

ケンペルの化石

ロンドン自然史博物館の軟体動物部門に保存されている標本は図1のようなものである．ベレムナイトのalveolusではなく，phragmocone であった．高さほぼ3ｃｍ，直径2ｃｍの円錐状である．標本番号　2050である．標本を見たあとで，標本台帳を見たいと告げたところ，それは博物館内の図書館にあるとのことで，図書館に行った．台帳のほうは予め知らせてなかったので，みつかるまで少し時間がかかった．そして出てきた台帳はSloane IIという台帳で，その2050のところには，*Spondylus*……と書いてある．私の見た標本は明らかに*Spondylus*ではない．どうもおかしいので，メモをとって帰国後もう１度確かめたところ，「2050 A very large alveolus from Japan by Dr. Kaempfer.」と書いてあるコピーが送られてきた．これは，いくつかあるスローンの筆跡と同じである．どうやら，スローンのコレクションは膨大で，同じ標本番号の物がいくつかあるようなこともわかった．

私の知っている限り，日本からはこのような標本は産出されない．偶然にも東京大学総合研究博物館所蔵のクラン

図１．ケンペルが日本で採集した標本．貴重なというスペルは誤っている．

ツ標本のM944bと大きさ，形ともよく似ている．M944bのラベルにはCenomanian Rowanと書いてある．Rowanはフランス，ノルマンジー近くの白亜紀ベレモナイトの産地として有名である．

そしてこれから

ケンペルはドイツで生まれたが，オランダで教育を受け，スウェーデン国王の海外使節団の１員として，ロシアに出，カスピ海をへて，イランに抜け，インドをへてバタビアに行き，そこで東インド会社の一員になり，日本に来ることができた．ケンペルはフランスに行っていない．でも世界中の化石を見ることの出来る立場にあった．世界各地を旅している間に自然史を見る目も十分に養成されていた．

日本では長崎出島に住み，２回参府している．かなり日本語はできたようである．堅不留という印まで持っていた．ほんとうに日本でこの化石を入手したのであろうか．

今のところ，このベレムナイトが日本産というのは間違いであろうと思われる．幸いにもまだ写真入りでは全世界に紹介されていない．さらなる研究が必要と考える．もし，何かお気づきの方がいらしたら，情報提供を願いたい．

謝辞

イギリス・キール大学のHugh Torrens博士，ロンドン自然史博物館のAnn Lum女史，Steve Baker博士 にお世話になった．心より感謝します．

文献

Edwards, W. N., 1967. *The early history of palaeontology*. 58 p., Trustees of the British Museum (Natural History), London.

Kaempfer, E., 1727. *The history of Japan* (Translated by J. C. Scheuchzer). London.[1906年の復刻版を1993年にCuzron Press Ltd.がもう１度復刻したものを参照した]

Thackray, J., 1994. Minerals and fossil collections. *In* MacGregor A. *ed. Sir Hans Sloane :Collector, Scientist, Antiquary Founding Father of the British Museum*, 123-135. British Museum Press, London.

ドイツー日本研究所, 1990.　ドイツ人の見た元禄時代　ケンペル展. 165p.ドイツー日本研究所.

(2002年10月24日受付，2002年11月13日受理)